

明治四年三月、一斉に捕縛されることになる。対立のさなかで苦しんだ延胤も病に伏し、間もなく病没する。

政府内部の主流派との対立のさなかでありながら、前橋神女の声に耳を傾けていたことは、政局史上貴重な時間を浪費させ、彼らの没落を早めることにつながったのかもしれない。自分たちの夢見た復古が実現されないことを嘆く中で、政治への願望を「幽界」に仮託したこの営みは、所詮はキース・トマスが言うところの「魔術」、すなわち「効果的な技術がないとき不安緩和のために実効のない技術を用いること」でしかなかったのだ、と言ってもそう誤りではあるまい。平田直門と対立した津和野派の頭目、大國隆正に言わせれば、「おのれもそのはじめは、しきりに幽界のことをとひなどしたりしを、いまおもへば、よしなしことにてありしなり。顕露・幽界あひかよはぬは、神道のおきてなり。」

とはいえ、スピリチュアリズムが政治運動に携わる主体を鼓舞するものとして機能したその有様は、平田国学が明治維新において果たした役割を確かによく示しているはずである。

### 自然災異の神道的表象の

#### 認知宗教学的アプローチの試み

井上 順 孝

認知科学で展開されている議論の中には、宗教研究に直接的に関わるようなものが含まれている。少なくとも次の二つは重

要である。一つは脳科学の進歩により、人間の認知の仕組みについての新しい見解がもたらされたことである。もう一つは、マクロな問題であり、そもそも人間が宗教というものをもった理由に関わる新しい説である。進化的適応環境(EEA)、二重相続理論(DIT)、ミーム理論など、新しい概念や理論が提起され、人間がある「信念」に捕捉されてしまうことに関する幅広い議論がなされている。

ここでは、主として二つ目に関わる議論を扱う。K・スタノヴィッチの「二重過程理論」を中心に、認知科学的なアプローチを宗教研究に適用すると、従来の宗教研究とどのような点で新たな視点が得られるのかを検討する。スタノヴィッチの二重過程理論は、人間にはTASS(The Automatic Set of Systems)と分析的システムという二重の認知機能があるとされる。ここにおける人間観は、遺伝子とミームという二つの複製子に影響を受ける存在であり、この二つの複製子に対し、人間は宿主(乗り物、ロボット)にたとえられる。宗教的信念を含む信念一般は、ミーム複合体として扱われている。しかし、進化心理学で主流をなすEEAを重視する見解には疑問を呈し、メタ合理性を追求すべきことを力説する。ここでの議論が従来の文化論と異なるのは、遺伝子もミームもひたすら複製を目指すということに注意を喚起し、そのことを人間が自覚すべきだとしている点である。

こうした見解を、自然災異に関する神道的表象に対して議論してみるとどうなるか。自然災異の表象は、これはウェーバーが注目した「苦難の神義論」に含めうるテーマである。この表

象は、地震、津波、旱魃、大洪水、害虫の大発生など、自然界が人間にもたらした苦難を禍として捉えるものである。共同体を襲うもので、「われわれはなぜこのように苦しまなければならないか」という問を喚起しやすい。通常の人間の「合理的」理解を超えたような現象に対する宗教的解決が問題になる。

神道の自然災異についての表象を考えていく上で、もつとも適切な対象は祝詞である。古代より現代に至るまで一定の観念・信念が複製されてきているからである。神道では禍が起るのには必然的と考えられている。禍(枉)津日神という存在は、禍をもたらす神である。しかし、ちょうどヒンドゥー教で破壊の神・シヴァが神々がなすべき基本的働きのなかに取り込まれているように、必然性がある存在し、なくなることはない。また善悪二元論における悪のように滅ぼすべき対象でもない。災異に際しても祝詞が奏上される。祝詞には災いに對し、これを予防したり、事後の清めとして行う内容のものがある。大祓祝詞と呼ばれるものは、年二回行われる大祓の際に奏上される。罪・穢れの発生は必然的と考えられている。災異に対する祝詞もその枠を出ない。これを仮に「禊・祓ミーム」となづけ、二重過程理論を適用させてみる。禊・祓ミームはまず分析的システムにはたらくが、場合によってTASSにも影響を及ぼすという図式が想定される。祝詞を通して「禊・祓ミーム」は、人々の脳にコピーされてきたと理解することになる。

このような観点から自然災異の神道的表象を分析していくことは、従来の宗教史的アプローチや、宗教社会学的アプローチ、とくに機能主義を援用したアプローチとどう関係づけられる

るのであるか。もつとも議論を呼ぶものは、ミームという視点を本格的に取り入れルユニバーサル・ダーウィニズムと呼ばれる立場にどのように対処するかであろう。ただ、受け入れるにしても、批判するにしても、人間観についての根本的な見直し作業を経ることは避けられない。

### アーネスト・サトウと国学

遠藤 潤

明治初年の在日欧米人の神道理解はどのようなものだったのか。今回の報告では、外交官として、不連続ではあるが幕末から明治十年代まで日本に滞在してさまざまな記録を残したアーネスト・サトウをとりあげ、この問題について考える。

サトウが神道について述べた文章のうち、最も重要な論文に *The Revival of Pure Shin-tau* (一八七四年後半に *Japan Weekly Mail* に連載、翌七五年に *Transactions of the Asiatic Society of Japan* に収録) がある。これは荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の四人に代表される流れを *the revivalist school of pure Shin-tau* (純神道リバイバル派) として把握し、その概略を描こうとするものである。

その前段階をなす問題意識は、萩原延壽が指摘したように、論文 *The Shin-tau Temples of Ise* に関して行われた日本アジア協会 (*the Asiatic Society of Japan*) のメンバーによる議論に現れている。宣教師をはじめとする日本アジア協会の欧